第3回 葬儀は誰のために、そして、何のためにするのか

回 〝不条理な死〟に見る宗教的情緒

今年の三月に起こった東日本大震災では、葬儀の根幹が改めて問われたような気がします。警視庁の発表によると、未だ一万四三四八名が行方不明とあり、被害の甚大さを物語っています。

メディア報道によりますと、増え続ける遺体と燃料不足から、一部の自治体では火葬能力が追い付かず、土葬が行われました。これは、遺体の腐敗と、伝染病を防ぐための特別措置として行われたものです。現在、火葬率九七％と言われる日本で、土葬が行われたことに衝撃を覚えられた方もいるでしょう。しかし、最も衝撃を受けたのは、土葬せざるを得なかった遺族の方々です。

仮埋葬では、故人を表象する名前や写真、供養の象徴である読経や花もなく、儀式らしいものは、遺族によって棺に砂がかけられたことだけでした。「葬式も出してやれなかった……」「火葬すらできなくて……」と、悲しむ遺族の姿に、儀礼を一切執行できない状況が、「死」とは別種の悲しみを与えていることに胸が痛みます。

この事態に一早く反応したのは、葬儀関係者たちでした。葬祭関連業者は遺体の処置や搬送を行い、僧侶は読経ボランティアを行ったのです。

当初、自治体の多くは仮埋葬期間を二年としていましたが、遺族からの強い要望によって、順次改葬が行われています。「死者をそのまま放置しておけない」、あ

るいは「行政処理に任せておけない」という遺族感情こそ、儀礼の動機となる宗教的情緒と言えましょう。つまり、葬送儀礼を行わないことは、〝弔う〟という根源的な宗教的情緒が発露できない、ということになるのです。

悲しみを乗り越える儀礼

「葬儀は誰のために、何のためにするのか」その答えには、二つの方向性が考えられます。一つは、死者に対するものです。葬送儀礼がもたらす死者への影響は、いわゆる供養などとして、各宗派宗教によって意義付けられてきました。もう一つは、遺族に対するものです。生きては二度と会えないという、絶対的別離を経験することによって、人は死を受容し、故人が存在しない〝新たな生活〟を歩んでいきます。この意味において、葬送儀礼には、再出発を可能とする力が秘められていることが分かります。

人生の節目となる儀式を通過儀礼と言い、葬送儀礼も通過儀礼の一種です。確かに、人生の終焉にのぞむ葬送儀礼は、私の命の節目でありますが、遺族の人生にとっても大きな節目となります。葬送儀礼は誰にとっても、大変重要な経験となるのです。

葬送儀礼を経験しないことの危険性

近年、葬送儀礼の意義を、「グリーフケア」として説明することが多くなっています。ここでも、遺族の悲しみを癒し、新生活への移行をスムーズにする〝死の受容〟が、重要なポイントとなっています。

では、死を受容できない場合はどうなるのでしょうか。グリーフには、ショック期、喪失期、閉じこもり期、癒し・再生期、の四段階があるとされています。〝不条理な死〟（震災や事故など）では特に、ショックが大きすぎ、喪失期と閉じこもり期が重複します。実際にはPTSDとして、身体的・精神的な不調を招く危険性があります。

死の受容は、厳しい現実と直面しなければなりません。「目を背けたい……、なかったことにしたい……」という気持ちを、そのまま放置することは、かえって私の命を危険にさらすことになると、私たちは知るべきです。

葬儀参列者はサポーターである

そのような事態を避けるべく、人間の英知として発展したのが葬送儀礼でしょう。葬送儀礼は、死という現実を否応なく突き付けます。一人では耐えがたい死や悲しみを、親族や知人と共有することで、死の受容をスムーズにさせてきました。

また、中陰を始めとする仏事は、悲しみを共有した人々との再会の場でもあります。僧侶を含め、葬送の場に立ち会った者は、遺族の新しい生活への旅立ちを支える、サポーターとなるのです。

葬儀を行わなければ、僧侶というサポーターは存在しません。また、親族のみの葬儀であれば、自身が話さない限り、友人・知人というサポーターは得られません。

死の受容は、誰しも経験しなければわからないことです。だからこそ、葬送儀礼を行う必要があるのです。

回 葬送儀礼は絆を深める

葬送儀礼には多くの習慣があり、一見すると面倒な、時代錯誤的な存在かもしれません。しかし、人と人の絆を深める、密着度を高めるという意味での拘束力が働いています。皆さんも子供の頃、葬儀や法事で大勢の親戚が集まると、お祭りのように嬉しく感じた経験があるでしょう。大人になれば、シガラミという負の拘束力に意識が向かいがちですが、絆を深めるという正の拘束力を、最大限に発揮しなければなりません。

そして、僧侶こそ、その旗振り役というべき存在となりましょう。昨今では、形式的な葬儀執行者としての僧侶に不満が集中し、葬儀無用論が大衆受けする時代です。議論の中には、僧侶と社会の積極的なコミットメントを求める意見もありますが、法務に忙殺され、それどころではない僧侶も多くいます。

では、そのような僧侶はどうすれば良いのでしょうか。私が思いますに、葬送儀礼の本質に立ち返り、葬式仏教を貫徹すれば良いのではないでしょうか。なぜなら、遺族のサポーターであり続けることを念頭に置いた法務に、形式的な……という表現はそぐわないからです。

（本願寺仏教音楽・儀礼研究所常任研究員　多村至恩）

---

i　二〇一一年六月十一日発表

※タイトル部分の図は徳力善雪作「親鸞聖人絵伝」第八幅（本願寺蔵、部分）。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所
真宗儀礼論研究会　リーフレット

◆シリーズ大遠忌Ⅰ　装　束
◆シリーズ大遠忌Ⅱ　荘　厳
◆シリーズ大遠忌Ⅲ　本山参り

当研究所ウェブサイトより
ダウンロード（PDF）できます。
（A4　カラー両面印刷　三ツ折）

（例　装束　中面）

◎本願寺仏教音楽・儀礼研究所
http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/